

子どもを中心に繋がる地域のちから

～男女共同参画社会の実現にむけて～

高齢化と少子化に伴う人口減少、情報化社会を反映したコミュニケーションツールの普及等、生活スタイルの変化を背景に大きく変動する社会の中で、地域社会の活性化と次世代への地域資源の継承を視野に入れ、様々な試みを実践している地域が静岡市清水区にある。

地域活動の拠点となっている寺院に出向き、住職をはじめ活動に関わっている人々に話を聞いた。様々な催しを行っている実行委員会の有志・ボランティアの皆さんがどのようなきっかけで活動を始めたのか、どんな思いで参加しているのか、老若男女の各層の人々の生の声を聞くことができた。どの催事でも女性たちが力を発揮し、そこに生き生きとした子どもの姿があることが印象的だった。取材を通して、地域における男女共同参画社会の実現をすすめるためのヒントを探っていく。

活動の背景

かつの しゅうびん
勝野 秀敏さん (住職)



龍津寺は、静岡市清水区小島にある、450年の歴史ある臨済宗妙心寺派の禅寺で

す。「小島藩主・瀧脇松平家の香華所」「白隠禅師の由緒寺」として長い歴史があります。お寺は地域のみなさんに支えられている場所なので、少しでも地域に恩返しをしたいとずっと考えていました。現在、通学合宿「ほうもう舎」、寺子屋、「分福食堂」、「いいなか広場」等の地域活動に関わっています。

禅寺の作法の中に「茶礼(さいれい)」というものがあります。ものごとの始まりと終わりに、同じ釜で湧かしたお茶をみんな揃っていただくというものです。「みんなで同じものを分かち合って心を揃える」ということが肝なんです。この「分かち合い」の幸せな時間を、同じ時代に同じ町に暮らしているみなさんと一緒に作りたいと思って考えたキーワードが、「分福茶釜」からヒントを得た「分福」でした。

実は、地域に目を向けてみると、すでにこの町には子どもたちの幸せを願いながらさまざまな取り組みをしている方々がいました。自発的に子どもたちの登下校の見守りをしているみなさん、絵本の読み聞かせをするグループ、子ど

もたちを集めて毎週無料で野球を教える元高校球児、小物作りを通して子どもたちを楽しませる母親のグループなどなど。そんなみなさんに感謝しながら、背中を追いかける形で、時には一緒に、できるだけグループや世代の違いを取り払って、楽しい時間を分かち合えるような催しを、と考えています。

分かち合いの自身はなんでもいいのです。温かいご飯、子どもの勉強や成長を見守る時間、ヨガのような身体に気持ちを感じる時間、写経や坐禅のような静かな時間でもいい。終わってから清々しい気持ちで一緒に茶を飲み、老若男女、共に分かち合いながらここに生きていることを感じる。それだけで本当に幸せなんだ、これでいいのだ、と最近改めて気づかされました。



通学合宿「ほうもう舎」

立ち上げ時から協力している
海野さん夫妻

うんの のりあき
海野 悟章さん



通学合宿「ほうもう舎」は11年前、子どもたちと地域の交流を深めようと小学

校・PTA、さらに自治会が連携して始めました。「ほうもう舎」の名前は明治時代にあった同地区の学校「包蒙(ほうもう)舎」に由来します。現在も地元小学校と連携し、当時のPTA役員他有志が実行委員会形式で支えています。年1回の催しですが、地元小島小学校の4、6年生の子どもたちが龍津寺の本堂に宿泊して、2泊3日の合宿生活を送りながら通学します。風呂は2、3人の組に分かれて近所の家にもらい湯に出かけるなど、地域の人々との交流を深めています。食事はボランティアスタッフが作った料理を食べ、片付けは男の子も女の子も一緒に手伝います。学生のボランティアの多くは、中学生、高校生となった卒業生です。

11年間継続していることは、この活動の立ち上げに関わらせて頂いた一人としてたいへん嬉しく思います。これからも継続実施していつてほしいものです。私も、開始当時の様子を現在の実行委員のみなさんに伝えていきたいですし、これからもらい湯の受け入れをしていきたいと思っています。

うんの よしみ
海野 好美さん



第1回からずっと、もらい湯で子どもたちを受け入れていきます。地域の子どものおかしとお手玉とでもうれしかった

「す」というメッセージカードは、何回もらっても嬉しいものです。私にとつては宝もの！ 大切に保管しています。

「ほうもう舎」は卒業した中学生・高校生も参加し、小学生の面倒を見ている。少子化で兄弟が少ない家庭が多いなか、このように地域で兄弟姉妹、家族のような関係作りができる場合は、ほとんどのないのではないか。参加した子どもたちが「大家族」を体験する貴重な機会になっている。

おじま分福食堂

こばりさちこ
小針 幸子さん



おじま分福食堂」は、2017年5月から地域の有志で始めた地域の共生食堂です。アイデアは、近年全国に広がっている「こども食堂」ですが、ここでは特定の誰かのためというわけではありません。年齢・性別、老若男女問わず、「同じ町に住んでいるのだから、月に一度はみんなでごはん」というテーマで、一緒にご飯を食べる、ただそれだけの企画です。

始める前には、おいしいごはんを食べながらおじいちゃんおばあちゃんからは昔の話を、子どもたちからは学校の話を聴いたり、そんな時間がここで生

まれるといいなあと思っていました。今回目の前で子どもたちが楽しそうにごはんを食べていると、大人も嬉しくてニコニコして、それを感じて子どもたちももつと嬉しくなる。食の楽しみというのは、「何を食べるか」よりも「誰と食べるのか」なのだと思えました。また配膳も片付けも、指示をしなくても子どもたちがどんどん率先して動いてくれる。その姿を見たおじいさんおばあさんが褒めてくれて、また自信がつく。大学生のお兄さんお姉さんたちには、プロレス技で挑んだりふざけたり存分に甘えさせてもらって、それはまた大学生にとつても得がたい経験につながり、参加する全員が幸せを分かち合っている実感があります。

そもそも活動を始めたのは、子どもが「ほうもう舎」に参加することになったのがきっかけでした。その実行委員に加わることで勝野さんと知り合いました。以降、子どもを通じて今日まで付き合いが続いています。一緒に活動をしている清水久美子さんとは、学校とPTAによる「おじパト」（小島防犯・交通安全パトロール・現在は休会中）や、読み聞かせグループの活動もしています。子どもを通しての繋がりがですね。定期的な開催については、女性たち（勝野住職夫妻、住職のお母さん、私と清水さんが中心）が力を出し合ひ、事前準備、当日の準備にあたります。当日は学生ボランティア、地域有志ボランティアの方の参加によって運営しています。食堂の運営に関わってみて、それま

で知り合うことがなかった若い世代のお母さん達や、自分よりも年齢が上の地域の方達との出会いがありました。結婚を契機に県外から転入してきたので、この地域に知り合ひはいまありません。それが、活動を通して地域のより多くの人と知り合ひになりました。また、活動に賛同する気持ちのある人、遠方からわざわざ来てくれる人たちと話すことがとても嬉しいのです。活動をしていなければ出会うことがなかった人達です。とてもすばらしい女性たちとの出会いでした。

夫は活動することに賛成してくれています。子どもは、小学校の読み聞かせなど、母親がいろいろな活動をしているのを目にしています。そしてその延長に食堂があると思っています。忙しい中でも時間があれば見に来ています。他地域でも行われているこども食堂を目



にした時、「お母さんがやっていたのはこれなんだ！」とわかってくれると思います。社会活動をする母親の姿を常に見て育っているので、「お母さんはすごい」と子どもも賛同してくれています。

「分福食堂」は、やりたい人が中心となり、都合のつく人が無理にならない範囲でボランティアとして関わるといふ形ですすめていけたらと思います。

人口が少ないこともあるでしょうが、ここでは、地域の中の子ども同士の横のつながり、縦のつながりを感じる場面がたくさんあります。寺での活動を通して、子どもが地域の中で、地域の人達に育てられているという実感があります。ここは家の大きい版なんです。

私自身、これから子育ても一区切りの時期を迎えます。仕事である塾の教師や大好きな接客業でのスキルアップを図りたいと思っています。人と関わるのが大好きなので、学校にはいけないけど、塾に通ってくる子どもや発達障害の子どもを持つ親たちの相談に寄り添っていき、こうしたことに関わることができたらと思っています。



しみず くみこ
清水 久美子さん



限られた食
材、限られた
予算の中で、
参加者のみな
さんに楽しく
食べてもらう

ためにどうしたらよいか、みんなで知恵を出し合いながら、当日の食事を準備していくことは、とても楽しいです。女性たちが意見を出しあうことは、とても大切なことです。

毎回いろいろな方の参加があり、ボランティアとして当日の運営を支援してもらっています。こうした方々との交流は何にも替えがたいことと感じています。月に一度、地域の人々さらに地域外の様々な人々が集まり、食事スタッフのみんなで作った温かい食事を一緒に食べる。配膳の時など、子どもがお盆で食事を運ぶ時、近くの大人が「足元気をつけてね」と声掛けをする。自分の子どもでなくても周りの大人がごく自然に見守る雰囲気、私はとても好きです。

大人だけでなく、子どもだけでもなく、自分の家族だけでもなく、この場に参加している人がゆるやかに繋がっています。この活動に参加できる喜びを感じる瞬間でもあります。分福食堂の日はワクワクします。これからも関わっていききたいと思います。

子どもは小さい時から、「読み聞かせ」や「ほうもう舎」の活動に関わってきている私の姿を見てきています。「分福食堂」にもごく自然に参加するように



なりました。中学生になって寺子屋には自ら進んで参加しています。夫も都合のつくときには分福食堂に参加しています。

現在、地域の子育て支援員、学校放課後の見守り支援員をしながら、地域の活動に出来る範囲で関わっています。これからこうした地域活動を通していろいろな人とながらながら、自分の生き方を考える機会にしていけたらと思います。

○取材を終えて

海野さん保管の通学合宿「ほうもう舎」開設時の資料に目を通すと、10年後の「ほうもう舎」のあるべき姿がこんな言葉で表現されている。

「ほうもう舎」の運営は、地域住民と小学校PTAとが協力連携し、「地域の子どもは地域で育てる」ことを実践する場である。

11年経った今でも、地域住民と教育関係者が連携しあい、着実に実践され

てきている。さらに、通学合宿「ほうもう舎」や「おじま分福食堂」だけでなく、「土曜子ども寺子屋」「いいなか広場」など、地域やそこに関わる人たちが、性別や年齢も関係なく、それぞれがそれぞれの場で、「子どもたちの成長を願う気持ち」「地域のお互いを思う気持ち」「わかちあいの思い」を形にしている。子ども達にとって、親以外の地域の大人との関わりはとても貴重だと感じた。地域の子どもを中心に顔の見える関係づくりに重きをおきながら、老若男女が繋がっている姿に、地域における男女共同参画社会のひとつのカタチを感じることができた。これらの活動を通して、子どもたちが身をもって学ぶことは多い。多くの大人の見守りの中、子どもたちは男女がともに手を取りあつてこの地域を支える大きな柱として育っていくのだと確信した。



こんな取り組みも
やっています

土曜子ども寺子屋

地元小学校と連携して月2回開催。子どもたちは「学校」でも「塾」でも「家」でもないここで、勉強だけでなく、「人としての生き方」も学ぶ。外部の社会人や大学生のボランティア、寺子屋卒業生など幅広い世代が集まり、運営を支えている。



社会人ボランティア
稲葉 由紀さん



大学生ボランティア
大谷 知さん

(赤堀 三代治)

伝統の一端を気負いなく担う

池沼織工房 千織 岸田明日美さん

かつては、天竜川の豊富な水と温暖な気候で綿花の栽培が盛んだった遠州地方。江戸時代中期、農家が副業で手織りを始め、野良着の生地として丈夫で汚れが目立たない木綿生地が織られるようになった。その後、豊田佐吉氏により発明された自動織機の導入により、それぞれの工程が職人による分業制となっていた。

高品質でありながら安価な綿織物は、昭和40年代を境に、化学繊維の普及や海外製品に押され生産量が激減。機械の老朽化、後継者不足、職人の高齢化により遠州地方の織物産業は衰退の一途をたどる。

遠州木綿との出会いは 思いもよらぬ瞬間で

大学卒業後、就職、数年務めた後転職を決めた岸田明日美さん。きっかけ



けは、遠州木綿と出会い生地に惚れ込んだことだ。転職先は遠州木綿の卸と販売をする会社で、3年半務める中で、池沼織工房を営む池沼友市さんとの出会いがあった。

結婚を機に退社するも、遠州木綿の魅力に引きつけられ、製造現場を支えたいとの思いは持ち続けていた。池沼さんに製造の現場の話を聞き、「私にできることがあるならばやってみよう」と思ったことが、工程の一端、「経通し」をやることに繋がった。

浜松市では、織物の業界全体が高齢化し、職人が次々と廃業している現実がある。生産者と卸・販売者が別、急速な機械の機械化などで発展してきたが、その状況が存続危機の原因ともなっている。

明日美さんは自分の立場を「延命治療的」という。自分一人が工程の一つを担ったとしても、その他の「総上げ」「精錬・染色」「糊付け」「管巻」「整経」などの工程を地元浜松でまかなうのは年々難しくなっている。技術を繋げるパートナーは、職人が辞める前に行わなければいけない。しかし、あまりにも安い工賃のため、後継者が育たなかった。

明日美さんは、それに加え、産地でありながら生産者と消費者が繋がっていないことに危機感を持っている。「できることしかできません。それでも、ボランティアで手伝いに来てくれて

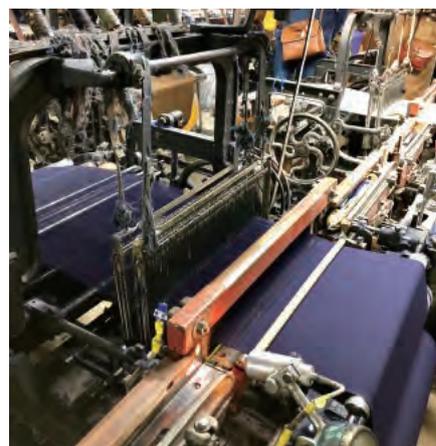
いる方や、この織物を良いと思ってくれる人、生地の魅力に気付いてくれる人が増えれば、今後もなんとかなるのかな、と思うこともあります」

新たな関係作り

「この織機、シャトル織機でないと出ないラフな触感があります。織機が違えば違うモノができます。良い物だから作り続けたい、知ってもらいたいという思いだけ」

そんな思いがあり、作業場兼店舗の「千織」を立ち上げた。工場見学を含めた現場からの情報発信、生産者のこだわりや思いを直接消費者に届ける場所として設けた。しかし今は、消費者からの要望や声を吸い上げ、生地作りを生かすという、生産者と消費者、双方に情報が行き来する場所になっている。

様々な場所で、遠州木綿の良さを知ってもらい広める取り組みが行われるようになった。「伝統の一部を担っている感覚はないです。良いものであれば



必ず残っていきます。今後、私が出産や子育てで、仕事を続けることができなくなる場合もあります。それまでに何とか安定した収入の目処を付けて、誰がやっても収入に繋がる仕組みをつくりたいんです。私がいなくても回るように」と、語る明日美さん。生産者として、遠州木綿を継続させ、さらに消費者を巻き込む新たな展開を模索している。

遠州木綿を中心に、新たな人の輪や関係が広がっている今。そこには、これからの地域作り、モノと人の関係、これから担う女性の生き方、やりたいことを優先する働き方モデルがあるように感じる。これからも遠州木綿と展開に注目していきたい。

(國井良子)

池沼織工房千織

浜松市浜北区中条574-1

TEL 0800-8251132480

HP hatayachiori.shop-pro.jp

私の視点で、未来をデザインする

有限会社小林造園 1級造園施工管理技士 望月千尋さん

望月千尋さんは、仕事の傍ら街づくりなどの複数の市民活動に取り組むから小学5年生の子の母でもある。自分や家族だけでなく、社会全体のよりよい未来を目指し奔走する彼女に話を聞いた。

公園づくりは街づくり

両親が始めた造園業は、彼女が大学生の頃には近隣の公共施設の整備事業に広く携わっており、庭園等の設計施工を担当していた。彼女自身も、家業を意識し東京農業大学造園学科に進学。都内の公園めぐりを趣味としていた。

その後就職し、公園やビオトープの設計をする仕事に就いた。公園づくりのために、ワークショップでアンケート調査も手掛けた。地元の声を聞き、公園の遊具を選び、設計する。それは街づくりにつながる仕事だった。

富士宮焼きそば学会の事務局に

2000年に退職し、実家の会社の事務職と掛け持ちで、後のB-1グルメブームをけん引する、「富士宮焼きそば学会」



の事務局スタッフとなった。取材対応や焼きそばの店を案内する業務。毎日のように焼きそばを食べ歩き、店のデータを地図に落とし込んでいく活動に力を注いだ。平日は仕事で、休日には全国のイベントで焼きそばを焼く日々だった。2004年に以前の職場で知り合った男性と結婚したが、結婚生活がままならないほど造園業と焼きそば学会の活動の両立に忙しかった。夫への申し訳ない思いが募っていった。

当事者の声を届けたい

そんな中、流産を繰り返すようになり、焼きそば学会の活動を続けられなくなった。県外の病院に通い原因を調べたところ、不育症だと判明した。幸い、適切な治療を受けることができ、2007年に無事出産できた。その経験から、県主催の不育症当事者の交流会に何度も参加し、不育症への理解や支援を呼びかける団体「不育症そだつてねっと静岡」の会員になった。

2011年には子育て当事者によるまちづくり活動団体「富士宮市民と子育て環境を考える会・富士宮つ子はぐくみ隊」を立ち上げた。団体では市の公園遊具再整備事業に参加し、遊具選定等に意見、提案している。自身の公園設計者としての経験や知識を生かしながら、市民の声を形にしていく事業に関わることができ、心が踊る思いだという。新遊具の落成式にはできる限り娘を連れていく。新しくなった公園で遊ぶ子どもたちを眺めると、喜びがわいてくる。

造園業のこれからを見据えて

仕事では、造園業の今後には花を扱えるスキルが必要と感じ、グリーンアドバイザーやハンギングバスケットの資格を取得し、それが生かせる事業を進めてきた。



植物とふれあう機会を子どもたちに

子どもたちに植物とふれあう機会をほしいと願い、商業施設に花壇を新設する事業では、地元の幼稚園児を招いての植花祭を担当した。静岡デザイン専門学校で「ガーデンデザイン」の講師も務めている。

実家の会社は父を中心とする男性社会だが、彼女が入ったことで視点が新鮮だと喜ばれ、社内の雰囲気も和やかになったと言われたそう。「自分がこの会社にいる意味があると感じる。ずっと社長についてきたから、社長が目指す会社や造園業界像を意識するようになった。そんな社長が2018年に体調を崩し一時入院していたこともあり、私がしっかりとやるしかないなと思っている。私がいてくれてよかったと、仕事を任せられるお施主さんも出てきて手応えを感じている。仕事が世の中の役に立っていると実感できることがうれしい」と語る。

すべては次世代のために

2017年からは居場所づくりの取り組み「のんびり広場」を、2018年には地元企業と連携して新しい食育の取り組み「のんびり食堂」を始めた。家業、講師業、子育てと忙しい毎日であるものの、不育症や街づくり団体のボランティア活動もあきらめたくない。「収入がほとんどない市民活動はそろそ

る止めて家業に専念したらと言われることも多々あるけれど、わが子だけのためにやっている活動ではない」からだ。



この街に住んでいてよかったと思えるように

「すべては世の中がよくなるため、子どもたちのため、次世代のため、その思いで続けてきた」と言う。市民活動を通じて経験してきたことも、彼女を形成している大切な要素なのだ。ボランティアは子育てや仕事をリタイアした後にするものではないのか、と言う人もいる。しかし、子育て中の今の自分の感性で理想の世の中を目指して動くことにこそ意味があるのだ。移り変わりの激しい世の中で、柔軟に考え動きたいと彼女は思う。「子育てをする中で直面した社会の課題を、自分が現役のうちにより少しでも改善して、子どもたち孫たちによりよい社会を残したい。自分の中のこの確固たる思いを、家族や社員に理解してもらえらるよう、コミュニケーションを図っていきたい」と語る。

子育てと両立しながら家業を継ぐのは容易ではないだろう。並行して街づくりの活動を続けることもまたしかり。でも、「私たちの世代が築いた社会はそのまま次世代に引き継がれていくのだから、ぼんやりしている暇はない」

彼女はこれからも笑顔でこの街の未来をデザインしていく。(藁科可奈)

有限会社小林造園

富士宮市栗倉982-16

TEL 0544-24-4533

HP <http://kozogogo.com/>

あざれあ図書室にある おすすめ本を紹介します!



『世代の痛み: 団塊ジュニアから団塊への質問状』
(上野千鶴子 雨宮処凛 中央公論新社 2017年)
「その気になれば未来は変えられる」という希望を持つことができた団塊世代と、持てなかった団塊ジュニア。“希望格差”ともいえる世代間の隔たりの原因は何なのか、両世代を代表する2人が語り尽くします。



『日本のフェミニズム: since 1886 性の戦い編』
(北原みのり//責任編集 河出書房新社 2017年)
1886年設立の婦人矯風会からJKビジネスまで、女性であるがために受ける苦しみと向き合ってきた性をめぐる戦いの記録です。時代を超えて引き継がれてきたシスターフッドのこれまでといまがわかります。



『300年まえから伝わる
とびきりおいしいデザート』
(エミリー・ジェンキンス//文 ソフィー・ブラッコール//絵 あすなる書房 2016年)

お母さんも、おばあちゃんも、ひいおばあちゃんも食べていたとびきりおいしいデザート。あと片づけのお楽しみはどの時代も共通ですが、作り方以外に変化したのはどこでしょう? 探してみてくださいね。

利用案内

貸出: 図書5冊、ビデオ・DVD2本(2週間)
*貸出カードが必要です。現住所、生年月日を確認できる身分証明書をお持ちのうえ、カウンターにてお申込みください。
開室時間: 平日9:00~18:00、土日祝9:00~17:00
休室日: 第1・3・5日曜日、図書整理日
TEL: 054-255-8763 FAX: 054-255-8759

編集員募集

- 募集人員 / 若干名
- 仕事内容 / 男女共同参画の今を知る情報誌「ねっとわあく」(年1~2回発行)の企画・取材・原稿案の作成・編集から発行まで
- 作業会場 / 静岡県男女共同参画センターあざれあ
- 募集締切 / 平成31年4月8日(月)まで
- 応募書類 / 応募用紙、作文「私の考える男女共同参画とは」(1000字以内)で選考
- その他 / 1号発行につき3万円程度。別途、会議や取材などの交通費支給
- 問合せ先 / あざれあ交流会議グループ
TEL 054-250-8147 E-mail info@azarea-navi.jp

静岡県男女共同参画ポータルサイト
あざれあナビ



ねっとわあく

2019/3/13 Vol.72

Shizuoka Prefecture

「ねっとわあく」は年1~2回発行します。県内の男女共同参画センター、市町役場、図書館などの公共施設で配布しています。「ねっとわあく」のバックナンバーは、あざれあ図書室や静岡県男女共同参画ポータルサイト「あざれあナビ」で閲覧できます。
あざれあナビ <https://www.azarea-navi.jp/>

編集後記



後列左から 赤堀三代治 勝村諒功
前列左から 藁科可奈 國井良子 白木菜々美

● 今では当たり前に使っているネット環境、30年前には考えられなかった。生活の中にそれが加わってから、速さや拡散範囲は想像を超える。しかし、情報の質はどうだろう。便利になった分、精査できなければそれに踊らされることも。新しい時代、見極める力がよりいっそう試されるように思う。

(編集長 國井良子)

● 平成最後の「ねっとわあく」の編集に関わる機会を得たことに感謝しています。72号の企画・取材・編集を通しての数多くの方々との出会いと共同の作業は、私にとって何にも得難いものとなりました。真の男女共同参画社会の実現にむけて何ができるか、自問していきたいと思います。

(赤堀三代治)

● これから先、時代や社会は変わっていくだろうけど、自分はその中でどう生きていくべきか。何を考えて、声をあげていくべきなのか考える機会になりました。編集員をさせていただいて良い経験になりました。編集員の皆さま1年間ありがとうございました。

(勝村諒功)

● 今の自分だからこそ書けることであり、書きたかったことを今回の記事で形にすることができました。問題に答えを出すことは難しくても、問題について考えることは諦めずに、新しい世代へより良い社会を引き継いでいきたいです。

(白木菜々美)

● 編集員歴も3年目となり、これで6冊目の「ねっとわあく」だ。今号では私が尊敬する人たちに取材することができた。快くご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願ひします。

(藁科可奈)

発行日/平成31年3月13日
企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ
〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1
TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/國井良子
編集員/赤堀三代治/勝村諒功/
白木菜々美/藁科可奈
印刷/星光社印刷株式会社

